

自己意識及び同調行動が大学生の服装選択に及ぼす影響

心理学科 17HP218 齋藤千愛

(指導教員：長野祐一郎)

キーワード：自己意識、同調性、ファッション

問題と目的

心理学の分野では被服行動と同調性との関連が指摘されており、岡林(2017)の研究においては、同調的な行動を検討する上で実際の被服行動選択は重要な要因になると考えられている。また、同調性は自己意識とも深い関連があるとされている(葛西・松本,2010)。このことから、本研究では被服行動と同調性や自己意識との関連に注目した。同調性と自己意識の関連を再検討するとともに、未だ知見の少ない「服装による印象管理」との関連について調査しようと考えた。6つのファッションシステムを取り上げ、自己意識及び同調行動が大学生の服装選択と印象管理にどのような影響を及ぼすのか考察することを目的とした。

方法

実験参加者 大学生 62名(男性 22名、女性 40名)、平均 19.92歳($SD=0.94$)を対象とした。

心理指標 (1)同調行動尺度(葛西・松本,2010)より13項目、(2)日本語版自己意識尺度(菅原,1984)より6項目、(3)「普段、学校に着ていく服装に最も近いシステム」(参考画像は予備調査にて選定)、(4)「学校に着ていく服装を決める際に、自分をどのように印象付けたいと考えているか」について、大石(2010)が用いた印象評定尺度、井上・小林(1985)の形容詞対を参考に12項目を用いた。

手続き オンライン形式の講義において調査協力を依頼した。調査の説明や画像の呈示はWordファイルを使用し、質問への回答はMicrosoft Forms機能を使用した。

結果

同調性と公的自己意識には有意な正の相関がみられた($r=.29$)(図1)。また、性格特性に限らず、カジュアルシステムとシンプルシステムを選択する学生がほとんどであった(表1~3)。

シンプルシステムは、同調性と私的自己意識のデータにおいてきれいめ・クール・ストリートシステムよりも有意に回答人数が多かった。公的自己意識では、ストリートシステムにおいて高群の人数が有意に多く、低群の人数が有

表1 同調性得点を基準とした、システム・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	13	1	3	11	3	0
低群	7	5	3	12	4	0

表2 公的自己意識得点を基準とした、システム・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	10	1	1	13	6	0
低群	10	5	5	10	1	0

表3 私的自己意識得点を基準とした、システム・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	9	3	1	14	4	0
低群	11	3	5	9	3	0

意に少ないことが示された。印象管理に関して、同調性と「ユニークさ」の間には有意な負の相関、公的自己意識と「真面目さ」「のんびりさ」との間には有意な負の相関、「派手さ」との間には正の相関が有意な傾向にあると示された。私的自己意識は、どの項目とも関連がみられなかった。

考察

シンプルシステムを選択した人が他システムよりも有意に多いことについて、様々なファッションシステムやアイテムに合わせやすいという理由がある可能性や、実用性を考慮して服を購入する人が多い可能性を考えた。独創的なイメージが強いモードシステムを選択した人がいなかったことにも、この結果は一貫しているだろう。

公的自己意識高群でストリートシステムの回答人数が有意に多く、さらに公的自己意識が「派手さ」との間に正の相関がみられた。これは「地味でダサいと思われたくない」という自分の外見に対する懸念があるために、若者の流行を象徴するストリートシステムを選択したのだと考えた。大仁田・崔(2013)は、人間関係において重視されるのは外貌の魅力であり、自己の身体像が他者に劣ると、個人の情緒や態度に否定的な影響を与えている。

また、同調性が高いほど、ありふれた印象を与えたいという結果になった。葛西・松本(2019)の研究から、自分はみんなと同じであるという意思表示をすることで、不安を解消しているのではないかと考えた。また、公的自己意識が高いほど、「地味でつまらない人間」だと思われることを避けたいという理由で、派手で、不真面目で、てきぱきしていると思われたい人がいると推測した。逆に、公的自己意識が低いほど、他人の評価は考えずに自然体で過ごすため「のんびりしている」等の親しみやすい印象を与えようとしていると考えられる。

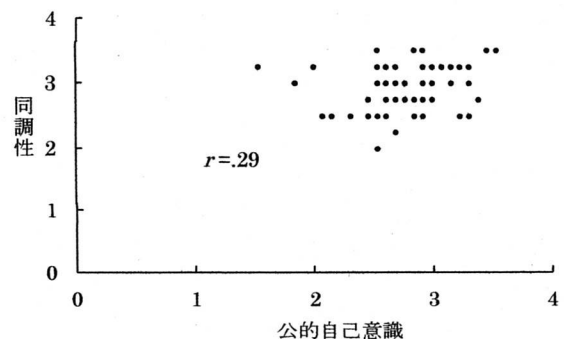


図1 公的自己意識と同調性の相関

自己意識及び同調行動が大学生の服装選択に及ぼす影響

学籍番号 17HP218

氏名 齋藤千愛

指導教員 長野祐一郎

問題と目的

〈若者のファッションの流行について〉

Twitter や Instagram などの SNS の発展によって、近年、それらが情報源としての存在を確立するようになってきた。2017 年の総務省情報通信研究所による調査では、20 代の代表的な SNS 利用率は 97.7% であり、生活の中に自然に SNS が組み込まれている。さらに、Testee Lab(2019)が 10 代から 20 代の男女を対象に行った「ファッションに関する調査」では、各性年代において「SNS」が最も多い情報収集法であった。中でも、男性では Twitter、女性では Instagram が最も利用されていることが分かった。そして近年では、「WEAR」などファッションコーディネートアプリを利用して、性別や年齢問わず数多くのスナップショットを見ることができている。様々な手法で、世間の流行をいち早く吸収することができる時代になってきている。

〈ファッションと同調行動〉

その一方で、「量産型」ともいわれるファッションが話題になっている。「量産型」とは、同一モデルが大量に作られる、あるいは用いられるという意味で、個性を失い同じような服を着るようになった女性を表す否定的な言葉であり(今川,2018)、主に女子大生に呼称されるのが「量産型女子」である。中学・高校では基本的に制服やジャージを着ていたが、大学生になって私服登校が可能になると、何を着ていかわからなくなる人が多い。そこで、SNS やファッション雑誌などを参考に、世間で「可愛い」「おしゃれ」とされている服装と同じような格好をすることで「ダサいと思われたくない」という不安を解消しているのではないだろうか。ファッションに個性を出すことよりも、周りに合わせて自分が浮いてしまわないことを重視していると考えられる。その不安を解消するために、先ほど挙げた SNS が活躍している。SNS で見た、おしゃれな人のコーデを真似する人が増えることで、結果的にみんな同じような格好をする、いわゆる「同調行動」がうまれると考えられる。

〈同調行動と自己意識〉

近年の研究でも、青年期、とくに大学生において以上のような同調行動が顕著にみられると指摘され、同調行動には自己意識も関係しているとの意見もある(葛西・松本,2010)。自己意識とは、自分自身に向けられる意識のことで、自己の服装や髪型、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向けやすい公的自己意識、自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向けやすい私的自己意識に分けられる(菅原,1984)。同調行動と自己意識の関連を検討した例として、吉武(1989)の研究が挙げられる。吉武(1989)は、架空の首長選挙について候補者 4 人の中から当選者を選ぶという課題において、集団の中で突然急激に多数者が形成される突発型形成条件・多数者が徐々に形成される徐々に型形成条件に分けて、それぞれ回答にどのような差がうまれるかを検討した。結果、どちらの条件も、公的自己意識高者は、低者よりも同調率が高いことが示された。また、岡林(2017)の研究では、被服選択において同調的である人と非同調的である人の割合はほぼ変わらないが、同調的被服選択群は、非同調的被服選択群よりも自己を積極的に表出しないことが示された。さらに、岡林(2017)は、被服選択においては視覚的情報を含有するという性質上、表面的同調を容易かつ端的に他者に表現することができるため、同調的な行動を検討する上で実際の被服行動選択は重要な要因になり得るとしている。被服行動については、大石(2010)研究において、場面別に服装によって自分らしさを意図的に管理していることが明らかになった。

このように、同調性と自己意識の関連、さらにそれらと被服行動の関連を検討した研究は多くある。

だが、服装による印象管理と同調性・自己意識の関連についてはまだ取り上げられていない。そこで、本研究では同調性と自己意識の関連を再検討するとともに、とくに服装の選択がしやすい大学生において自分をどのように印象付けたいと考えているか調査しようと考えた。「カジュアル」「きれいめ」「クール」「シンプル」「ストリート」「モード」の6つのファッション系統を取り上げ、実際に画像の呈示によって前述の6系統を示したうえで、同調行動及び自己意識が大学生の服装選択と印象管理にどのように影響を及ぼすのか検討することを目的として調査を行った。

具体的には、岡林(2017)の研究から「仮説 1: 同調性が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」、同様に、公的自己意識高者は低者よりも同調率が高い(吉武,1989)ことから「仮説 2: 公的自己意識が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」という2つの仮説を立てた。ただし、ここでの「保守的」とは、「カジュアル」「シンプル」「きれいめ」系統のことで、「クール」「ストリート」「モード」系統は「非保守的」な服装とする。

まずは、こちらの選択した画像が調査対象者にどのような系統で認識されるのか検討するため、予備調査を行った。

予備調査

調査方法

参加者

大学生 40 人(うち男性 20 人、女性 20 人)を対象とし、オンライン形式の講義において調査協力を依頼した。平均年齢は 20.23 歳($SD=1.10$)であった。

呈示画像

画像の選定は、大学生をターゲットに含むファッション雑誌「FINEBOYS」(メンズ)、「MEN'S NON-NO」(メンズ)、「Smart」(メンズ)、「men's FUDGE」(メンズ)、「non-no」(レディース)、「ViVi」(レディース)、「mini」(レディース)、「FUDGE」(レディース)より行った。この中から女性に呈示するための画像 18 枚、男性に呈示するための画像 18 枚を選び、系統を判断するために不要な背景は出来る限り切り取って Word ファイルに貼り付けた。

手続き

Microsoft Forms 機能を使用し、アンケート調査フォームを作成した。質問は「画像○の服装に最も当てはまると思う系統を、選択肢から 1 つ選んでください」とし、「カジュアル」「きれいめ」「クール」「シンプル」「ストリート」「モード」の 6 つから選ばせた。画像の呈示には word ファイルを使用し、計 18 枚の画像を呈示した。その際、調査の進め方については「回答フォームの質問項目 1~18 について、項目ごとに 1 枚、計 18 枚の画像をご覧ください、その画像の印象(服装の系統)について、選択肢からひとつ選んでください。例えば、質問項目 1 の場合、同じく項目 1 の画像をこの Word ファイルからご覧ください、画像について「カジュアル」という印象を受けた場合は、選択肢の「カジュアル」に●を付けてください。深く考えず、直感で回答をお願いします。」と案内した。リモートでの調査の為、呈示する装置は指定できず、参加者がそれぞれ所持するパソコン又はタブレット PC での閲覧を求めた。また、複数画像の呈示による判断の困難を避けるため、画像は 1 ページに 1 枚貼り付け、また、女性と男

性で閲覧ファイルを別に作成した。

結果

系統ごとに回答した人数を算出し、男女別で表にまとめた(表 1/表 2)。

表1 系統別の男性の回答人数(単位:人)

	画像1	画像2	画像3	画像4	画像5	画像6	画像7	画像8	画像9
カジュアル	13	2	4	5	5	1	9	2	11
きれいめ	0	6	0	0	0	1	0	8	0
ストリート	2	1	15	4	12	4	6	0	7
シンプル	4	7	0	3	0	2	2	9	1
クール	0	4	0	6	0	3	1	1	1
モード	1	0	1	2	3	9	2	0	0
	画像10	画像11	画像12	画像13	画像14	画像15	画像16	画像17	画像18
カジュアル	4	6	4	6	2	3	11	8	1
きれいめ	1	1	1	1	7	2	3	0	1
ストリート	0	7	4	4	2	4	1	6	3
シンプル	15	1	1	6	9	2	4	2	0
クール	0	1	1	1	0	6	1	0	4
モード	0	4	9	2	0	3	0	4	11

表2 系統別の女性の回答人数(単位:人)

	画像1	画像2	画像3	画像4	画像5	画像6	画像7	画像8	画像9
カジュアル	15	3	1	8	2	0	8	1	0
きれいめ	0	15	0	6	0	1	10	7	4
ストリート	2	0	16	1	16	1	0	0	1
シンプル	2	1	0	5	1	0	1	10	9
クール	1	0	2	0	0	10	0	1	2
モード	0	1	1	0	1	8	1	1	4
	画像10	画像11	画像12	画像13	画像14	画像15	画像16	画像17	画像18
カジュアル	3	8	0	12	2	8	9	6	2
きれいめ	0	0	0	0	16	2	1	3	3
ストリート	2	11	1	5	0	2	0	3	0
シンプル	2	0	0	3	1	0	10	4	0
クール	11	0	11	0	1	5	0	1	8
モード	2	1	8	0	0	3	0	3	7

(網掛け部分は、本調査に使用する画像)

この結果により、男性のカジュアル系統は画像 1、きれいめ系統は画像 8、ストリート系統は画像 3、シンプル系統は画像 10、クール系統は画像 15、モード系統には画像 18 を本調査の参考画像として使用することが決定した。また、女性のカジュアル系統は画像 1、きれいめ系統は画像 14、ストリート系統は画像 3、シンプル系統は画像 8、クール系統は画像 10、モード系統には画像 6 を本調査の参考画像として使用することとした。

以下に、本調査に使用することが決定した画像を記載する。ただし、各系統において、左側が女性、右側が男性の画像である(図1~図6)。



図1 カジュアル系統

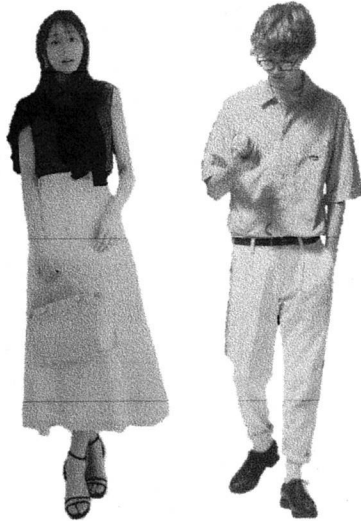


図2 きれいめ系統



図3 クール系統



図4 シンプル系統

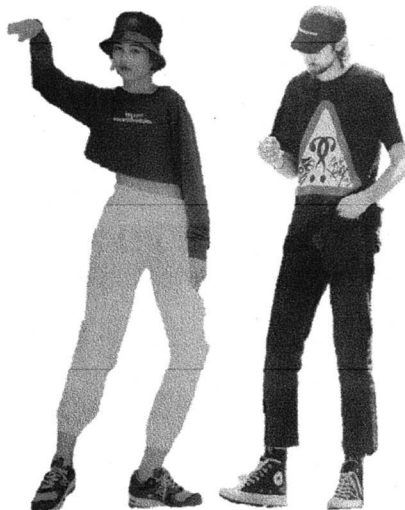


図5 ストリート系統



図6 モード系統

本調査

調査方法

参加者

大学生 62 名(うち男性 22 名、女性 40 名)を対象とし、オンライン形式の講義において調査協力を依頼した。平均年齢は 19.92 歳($SD=0.94$)であった。

心理指標

(1) 同調行動尺度(葛西・松本,2010)より、「親しい友達と同じような格好や行動がしたい」などの「仲

間への同調」因子と「自分の意見を主張するより、相手の考えや意見を聞く」などの「自己犠牲・追従」因子に分けた計 13 項目を使用した。「あなたの普段の学校での様子について、以下の項目にお答えください」という質問に対し、「1. 非常に当てはまる」～「4. 全くあてはまらない」の 4 件法で回答させた。

(2) 日本語版自己意識尺度 (菅原,1984) より、「自分が他人にどう思われているか気になる」などの計 6 項目を使用した。「普段のあなた自身について、以下の項目にお答え下さい」という質問に対し、「1. 非常に当てはまる」～「4. 全くあてはまらない」の 4 件法で回答させた。

(3) 次に、「あなたが普段、学校に着ていく服装に最も近い系統を一つ選んでください。」という項目を作成し、予備調査の結果から導かれた「カジュアル」「きれいめ」「クール」「シンプル」「ストリート」「モード」のイメージに合う画像をレディース、メンズそれぞれ 1 枚ずつ呈示し、一つを選択させた。予備調査と同様、呈示には Word ファイルを使用し、1 ページにつき男女 1 枚ずつ呈示し、系統でページを分けた。画像の閲覧方法については、「画像が男女ごとに 6 枚呈示されます。その中から、あなたが普段学校に着ていく服装に最も近い系統を一つ選択してください。回答フォームにて、選択した系統と同じ番号に○をつけて下さい。ただし、女性は「*女性」と記された左側の画像を、男性は「*男性」と記された右側の画像を参考に回答してください。」と説明した。

(4) 次に、「学校に着ていく服を決める際に、自分自身をどのように印象付けたいと考えていますか」という項目を作成し、12 の形容詞対それぞれについて「1. 非常に」「2. やや」「3. どちらともいえない」「4. やや」「5. 非常に」の 5 段階で回答させた。形容詞対については、大石 (2010) が印象評定に用いた尺度、及び井上・小林 (1985) がまとめた形容詞対尺度を参考にした(表 3)。

表3 印象評定項目

番号	項目	
1	暗い	明るい
2	消極的な	積極的な
3	陰気な	陽気な
4	不活発な	活発な
5	ありふれた	ユニークな
6	地味な	派手な
7	不真面目な	真面目な
8	強情な	素直な
9	男性的な	女性的な
10	感情的な	理性的な
11	内向的な	外向的な
12	てきぱきした	のんびりした

呈示画像

予備調査にて選定した男女各 6 枚、計 12 枚の画像を使用した(図 1～図 6)。調査に不要な背景は切り取って Word ファイルに貼り付けた。1 ページにつき、1 つの系統に対する参考画像を男女 1 枚ずつ計 2 枚貼り付けた。

手続き

予備調査と同様、Microsoft Forms 機能を使用し、アンケート調査フォームを作成した。調査の主な手続きを Word ファイルにて説明し、回答フォームにて回答してもらった。ただし質問項目(3)に関してのみ、回答するための参考画像があったため、Word ファイルを見ながら回答してもらった。リモート

での調査の為、呈示する装置は指定できず、参加者がそれぞれ所持するパソコン又はタブレット PCでの閲覧を求めた。

結果

〈同調性と各自己意識の相関〉

同調性と公的自己意識・私的自己意識それぞれの関係について、両尺度間の相関係数を算出した(図7/図8)。

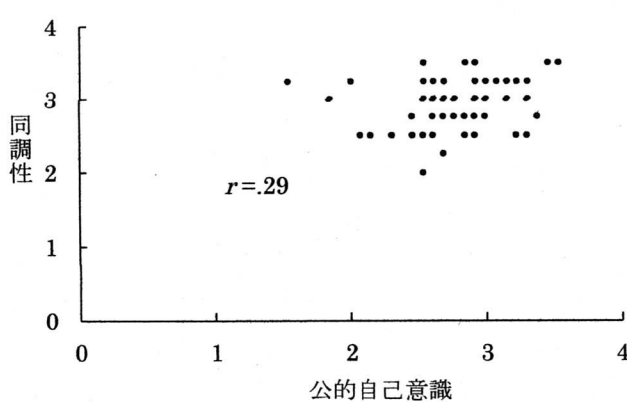


図7 公的自己意識と同調性の相関

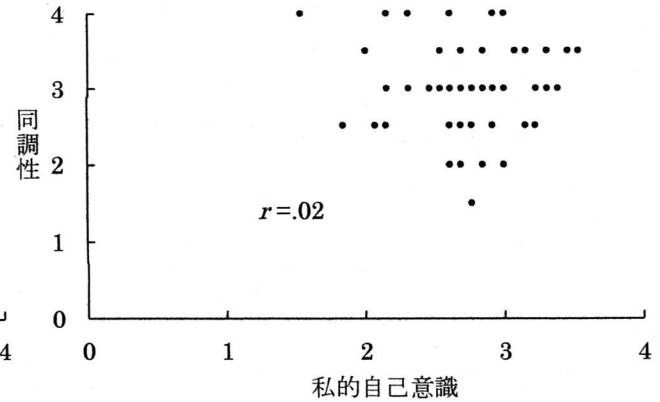


図8 私的自己意識と同調性の相関

公的自己意識において、同調性との間に有意な正の相関がみられた($r=.29$)。私的自己意識には、同調性との間に有意な相関はみられなかった($r=.02$)。

〈同調性得点と各系統の回答人数〉

次に、同調性得点を基準とした、全体・性別の各系統の回答人数を表4～表6に示した。

表4 同調性得点を基準とした、系統・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	13	1	3	11	3	0
低群	7	5	3	12	4	0

表5 同調性得点を基準とした、系統・群別の男性の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	4	1	1	4	1	0
低群	3	0	0	8	0	0

表6 同調性得点を基準とした、系統・群別の女性の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	7	1	3	7	2	0
低群	6	4	2	4	4	0

全体ではカジュアル系統を選択した参加者が最も多かった。そして、僅差ではあるが、高群ではカジュアル系統を選択する参加者が最も多く、低群ではシンプル系統を選択する参加者が最も多かった。どちらにおいてもカジュアル系統とシンプル系統の回答数が多く、モード系統を選択する参加者は一人もいなかった。男性では、全体で最も回答人数が多いのはシンプル系統であった。また、高群はカジュアル系統とシンプル系統、低群はシンプル系統が最も多かった。低群は、きれいめ系統、クール系統、ス

トリート系統、モード系統を選択した人はいなかった。女性では、全体で最も回答人数が多かったのはカジュアル系統とシンプル系統であった。高群はカジュアル系統とシンプル系統、低群はカジュアル系統が最も多かった。

さらに、それぞれのデータに関して χ^2 検定を行った。その結果、全体のデータに有意差が認められた($\chi^2(4)=22.677, p<.01$)。そして、ライアンの多重比較を行ったところ、シンプル系統がきれいめ・クール・ストリート系統よりも有意に多かった($p<.05$)。男性や女性のデータには、有意差は認められなかった(男性： $\chi^2(4)=4.476, n.s$ 、女性： $\chi^2(4)=3.562, n.s$)。

〈各自己意識得点と各系統の回答人数〉

次に、各自己意識得点を基準とした、各系統の回答人数を表7～表8に示した。

表7 公的自己意識得点を基準とした、系統・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	10	1	1	13	6	0
低群	10	5	5	10	1	0

表8 私的自己意識得点を基準とした、系統・群別の回答人数(人)

	カジュアル	きれいめ	クール	シンプル	ストリート	モード
高群	9	3	1	14	4	0
低群	11	3	5	9	3	0

公的自己意識を基準とする分類では、シンプル系統を選択する人が最も多かった。また、高群ではシンプル系統、低群ではカジュアル系統とシンプル系統が最も多かった。私的自己意識を基準とする分類でも、シンプル系統が最も多く、低群ではカジュアル系統が最も多かった。

次に、回答人数のデータに関して χ^2 検定を行った。しかし、サンプル数が不足しており群別の検討ができなかったため、両群を合わせたデータで検定を行った。その結果、私的自己意識のデータに有意差がみられた($\chi^2(4)=22.677, p<.01$)。さらに、ライアンの多重比較では、シンプル系統はきれいめ・クール・ストリート系統よりも有意に多いことが示された($p<.01$)。公的自己意識では、データに独立性がみられなかったために残差分析を行った。その結果、ストリート系統において高群の人数が有意に多く、低群が有意に少ないことが示された($p<.05$)。

〈同調性・各自己意識と印象管理の関連〉

さらに、「服装によって自分をどのように印象付けたいか」について、印象評定項目と同調性・公的自己意識・私的自己意識との関連を検討した。特に関連がみられた項目のみ、図に表す(図9～12)。

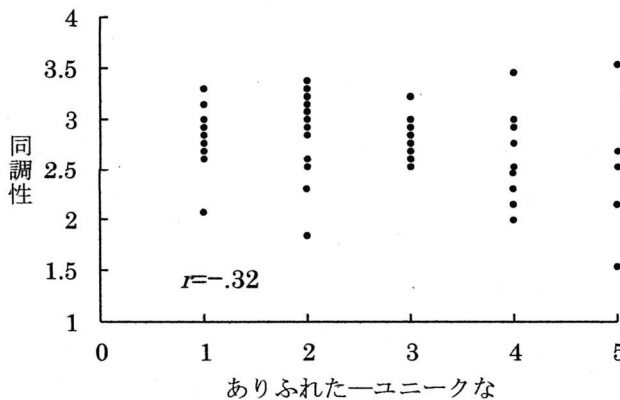


図9 同調性と「ユニークさ」との相関

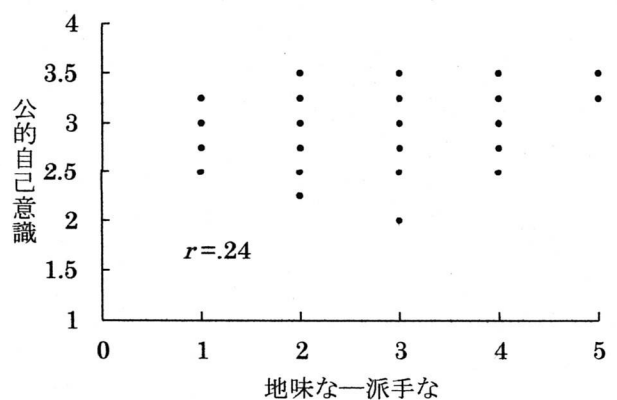


図10 公的自己意識と「派手さ」との相関

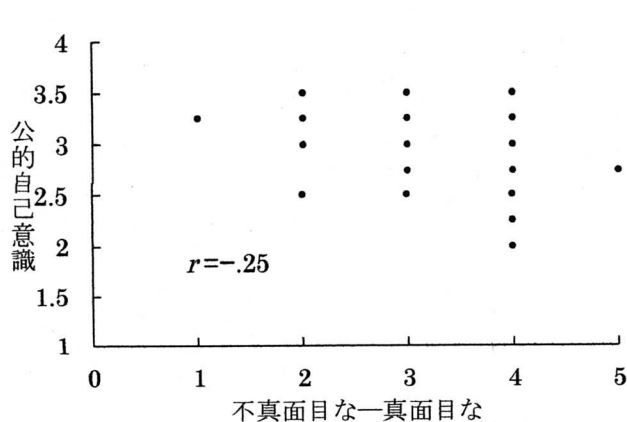


図11 公的自己意識と「真面目さ」の相関

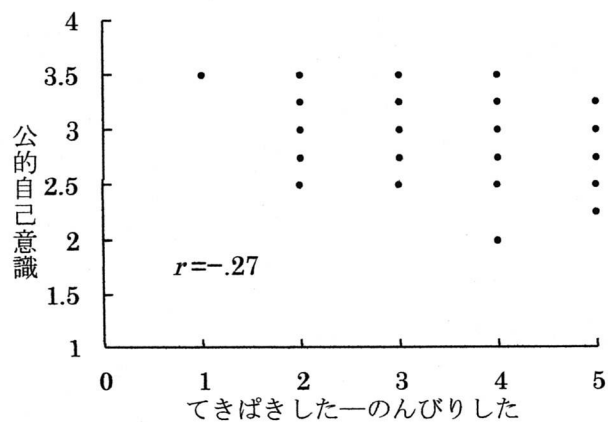


図12 公的自己意識と「のんびりさ」の相関

同調性と「ユニークさ」との間に有意な負の相関がみられた($r=-.32$)。したがって、同調性が高い人ほど、ありふれた印象を周囲に与えようとしていると言い換えられる。

公的自己意識との間に有意な負の相関がみられたのは「真面目さ」($r=-.25$)、「のんびりさ」($r=-.27$)の2項目で、正の相関で有意傾向を示したのは「派手さ」($r=.24$)の1項目であった。したがって、公的自己意識が高いほど、服装によって不真面目で、てきぱきしていて、派手な印象を周囲の人に与えようとしていると言い換えられる。

また、私的自己意識については、どの項目とも関連がみられなかった。

考察

本研究の目的は、実際に服装の系統別に画像を呈示し、「カジュアル」や「ストリート」などの系統を示したうえで、同調行動及び自己意識が大学生の服装選択にどのように影響を及ぼすのか検討することであった。そして、「仮説1：同調性が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」「仮説2：公的自己意識が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」という仮説を立てた。

〈同調性と各自己意識との関連〉

まず、公的自己意識においてのみ、同調性との間に有意な正の相関がみられた。したがって、公的自己意識が高く「周りからみた自分」を気にする人であるほど、同調した行動をとると考えられる。反対に、私的自己意識の高い人は自身の内面に注意を向け、態度や行動が周囲と一致しなくてもあまり気にならないため、同調性との関連が薄くなると考えられる。この結果は、吉武(1989)の結果を支持するものであった。

〈同調性・各自己意識と服装選択〉

次に、服装選択について考察する。同調性・公的自己意識・私的自己意識それぞれを基準として回答人数を数えても、カジュアル系統やシンプル系統が多かった。特にシンプル系統は、同調性の全体と、私的自己意識においてきれいめ・クール・ストリート系統よりも有意に人数が多いことが示された。今川(2018)の研究では、「服を購入する際に大切にしていることは何か」という質問に対し、「自分らしさが出ているか」に次いで「シンプルかどうか」と回答する参加者が多かった。そして、今回の調査でも、性格特性に関係なくシンプル系統を選択する参加者が多かった。このことから、服を選ぶ際にシンプルであることを前提として考え、そこからどう組み合わせるかによって自己を表現していると考えられる。

また、高校生以降になると憧れるファッションが半年ほどのスパンで変化し、そのたびに新しい自分になろうとする人が多いという考え(玉田,2002)やベーシックでカジュアルな服は被服の実用性機能を重視している人に嗜好される傾向があるという考え(川本・渡辺・黒田・中澤・中川,1992)もある。したがって、シンプルな服を選んだ方が様々なファッション系統に合わせやすいという理由から選択した可能性がある。

公的自己意識を基準とした分類では、ストリート系統において高群の回答人数が有意に多く、低群の回答人数が有意に少ないことが示された。また、各自己意識と印象付けの分析では、公的自己意識が「派手さ」との間に正の相関を示し、「公的自己意識が高い人ほど、派手に見せたい」という傾向がみられた。これは、性格特性に限らずシンプル系統を選びやすいという結果がある中で、とても興味深い結果である。Wikipedia(2019)では、ストリートファッションとはストリートにたむろする若者の中から自然発生的に生まれたもので、時代・文化・流行を背景として若者たちに支持されるファッションであると定義されている。大仁田・崔(2013)は、現代社会の人間関係において重視されるのは外貌の魅力だと考え、自己の身体像が他者と比べ劣るようであれば、個人の情緒や態度に否定的な影響を与えると推測している。公的自己意識が高い人は自分の外見や態度を気にする傾向にあるため、「地味でダサいと思われたくない」と思うほど、あえてシンプルな服を避け、若者の流行を象徴するストリート系統を選択する人がいたのではないかと考えた。

〈同調性・各自己意識と印象管理〉

同調性と「服装によって自分をどのように印象付けたいか」の関係について、「ユニークさ」との間に有意な負の相関がみられ、同調性が高いほど、ありふれている人間だと思われたいということが示された。これは、岡林(2017)の「同調的被服選択群は、非同調的被服選択群よりも自己を積極的に表出しない」という結果を支持するものである。今川(2018)の調査では、自分の服装を量産型であると思う学生は参加者のうち4割ほどで、その中でも7割以上が量産型であることに満足していた。また、現代の友人関係は表面的であると言われており、自分を偽り友人に同調することで不安を低減させ、他者に認めてもらおうとしていることが原因だと考えられている(葛西・松本,2010)。このことから、シンプルやカジュアルな服を着て周囲から浮くことを避け、同調の意思を示すことで安心感を得ているのではないかと推測した。

また、公的自己意識との関係については「派手さ」との間に弱い正の相関がみられ、「真面目さ」「のんびりさ」との間には弱い負の相関がみられた。このことから、公的自己意識が高いほど、自分を派手で、不真面目で、てきぱきしていると思われたいということが示された。自己意識(特に公的自己意識)が高いほど、社会的対象としての自己側面(行動スタイルや容姿など)に注意を向けやすいため(押見,2000)、公的自己意識が高い人であるほど、「真面目である」など相手にプラスな印象を与えようとする傾向にあると推測していたが、本研究の結果はその通りではなかった。「不真面目である」というのは、例えば少し授業をさぼってみることや、友人と冗談の混ざった会話や行動ができることなど、周りのふざけたノリに合わせてくれる程度だと考えられる。「正直者が馬鹿を見る」という言葉があるように、友人関係においては真面目過ぎるほうが周囲に受け入れられづらい場合がある。したがって、わざと不真面目な自分を装い、自分は柔軟な人間であると印象付けたいのだと推測した。てきぱきしていると思われたいということに関しては、会話や行動のタイミングを合わせるなど、周囲のペースを崩すことなく関係を築くことを重視している人が多い結果だと考えられる。

同調性と公的自己意識が正の相関を示す一方で、同調性の高い人はユニークであると思われたいくない

のに、公的自己意識の高い人は自分を派手に見せたいという結果が両立してしまい、矛盾しているのではないかと疑問を抱いた。ユニークであることと派手であることは一見同じような概念にも考えられる。しかし広辞苑では、「ユニーク」は「ほかに類のないさま」と定義され、「派手」は「色取り・装い・行動が華やかなこと」と定義されていた。このことから、ユニークと派手さは必ずしも同義語ではないことが分かった。したがって、公的自己意識の高い人は、ユニークな服装になることは避けつつ、周囲に受け入れてもらえる程度の派手さを追求していると考えた。何の特徴もない、あからさまに地味な服装で逆に浮いてしまうことや、おしゃれな友人と比べて自分が劣っているように見えることを恐れているために、あくまでも自分は「はずれていない」人間だと周囲に表現し、また自身にもそう言い聞かせることで精神を安定させているのではないだろうか。

私的自己意識と各形容詞対との間には、ほとんど関連がない結果となってしまった。これについては、私的自己意識の質問項目数が少なかったためだと考えられる。

〈その他〉

統計的に有意ではなかったが、シンプル系統において男性は同調性低群の方が人数が多いのに対して、女性は同調性高群の方が人数が多かった。今回の調査は、男女でシンプル系統を選択した参加者の人数はさほど変わらないのに、高低の内訳は真逆であった。これに関して、ファッションへの興味の度合いの差が原因ではないかと考えられる。服部・松村・田上・森(2007)の調査で、「大学入学後、以前よりもファッションに興味を持つようになりましたか」という質問に対し、「はい」と答えた1年男子は51.5%で、1年女子は87.1%であった。また、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社が2017年に行ったアンケート調査では、ファッションに興味がある18~29歳の男性の割合は20%、また女性の割合は45%という結果であった。どちらも、男性より女性の方が2倍近く高い割合となっている。したがって、同調性が低い男性の場合、周囲と合わせることにあまり気を遣わず、流行やファッションへの興味も薄いために、こだわりがなくシンプルな服を選びがちになってしまうのだと考えた。

また、今回の調査ではモード系統を選択する参加者は一人もいなかった。Fashion Work Media(2019)によれば、そもそも「モード」とはフランス語で「流行」という意味で、移り変わりも早くまさに「最新・最先端の流行」と定義される。カラーはモノトーンのもものがほとんどだが、布地が変形していたりレイヤードしていたりなどディテールにこだわったものが多いため、シルエットが特徴的ともいえる(TOPLOG,2018)。このことから、モード系統を選択する人が誰もいなかったのは、独創的・個性的なファッションというイメージが強いために敬遠されているからだと考えられる。そして、この結果はシンプル系統を選択した人が多い結果にも一貫性があると考えた。

〈おわりに〉

以上から、同調性や自己意識は大学生の服装選択及び印象管理に少なからず影響していると考えられる。特に印象管理については、現代の友人関係において重要な役割を果たしていると推測される。仲間と同調し、自分は皆と同じであるという意思の表現に被服行動は有効に活用されているといえるだろう。しかし、過剰な同調行動は、アイデンティティの確立に否定的な影響を与える可能性がある懸念されている(安達・安達,2019)。その問題を改善させるために、「アサーション・トレーニング」というものが注目されている。アサーション・トレーニングとは予防的な心理教育の一つで、人々の自己主張をより適当なものにすることを目指し、自尊心や自己肯定感を高めて自己をありのままに受け入れることを大学生の発達課題としている(安達・安達,2019)。表面的同調が横行する現代では、他者だけでなく自己を尊重することが何よりも重要になるだろう。

本研究では「仮説 1：同調性が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」、「仮説 2：公的自己意識が高い人ほど、保守的な服装を選択しやすい」という 2 つの仮説を立てており、カジュアル系統とシンプル系統において一部有意ではなくとも他系統との差がみられたため、どちらも立証されたこととする。今後の展望としては、系統を示す際、画像だけでなくその研究における系統ごとの定義も参加者に説明するべきだろう。被服行動を扱う研究は服飾系の学校に通う学生を対象にしたものが多いため、ほとんどの参加者はファッション系統の定義を理解していると考えられる。しかし、本研究の対象は心理学科の学生であったため、解釈に差がうまれる可能性が十分にある。実際に、参加者の中にファッション用語の意味が分からなかったという人がいた。したがって、系統ごとに定義をしっかりと示すことでより統制された調査になると考えられる。

引用文献

- 安達知郎・安達奈緒子(2019).大学新入生に対するアサーション・トレーニングの効果—適応感とアイデンティティ、自己受容に注目して—教育心理学研究,67,317-329.
- Fashion Work Media(2019).モード系ファッションとは？モードに魅せるポイントも解説
<https://www.esmodjapan.co.jp/column/knowledge/fashion-genre/mode-fashion>
- 服部由美子・松村美帆子・田上秀一・森 透(2007).大学生の服装に関する意識と現状—学校制服と私服についての調査から—福井大学教育地域科学部紀要V(応用化学 家政学編),46,1-8.
- 井上正明・小林利宣(1985).日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観.教育心理学研究,33(3),69-76.
- 今川真治(2018).女子大学生の量産型ファッションに対する意識と態度.広島大学大学院教育学研究科紀要,2(67),279-287.
- カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社(2017) ファッションに関するアンケート調査
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000251.000000983.html>
- 葛西真記子・松本麻里(2010).青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成—。鳴門教育大学研究紀要,25, 189-203.
- 川本栄子・渡辺澄子・黒田喜久枝・中澤乃智子・中川早苗(1992).服装イメージの嗜好傾向と被服行動との関連.繊維機械学会誌,45(11),53-63.
- 岡林誠士(2017).大学生の同調的服装選択行動についての調査研究.文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要,48,13-22.
- 大石さおり(2010).女子大学生が意図する服装による印象管理効果.日本感性工学会論文誌,9(3),503-510.
- 大仁田あずさ・崔光善(2013).女子高校生の身体像、自己意識と痩せ願望が摂食行動異常傾向に及ぼす影響.薬膳科学研究所研究紀要,6, 53-63.
- 押見輝男(2000).自己意識特性と同調行動—同調動機と課題関心度の調節効果—。心理学研究,71(4),338-344.
- 総務省情報通信政策研究所(2017).情報通信白書平成 29 年版
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111130.html>
- 菅原健介(1984).自己意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み.心理学研究,55(3),184-188.
- 玉田真紀(2002).ファッションへの興味と自己形成.デザイン学研究特集号,9(4),39-46.

TesTee Lab(2019).ファッションに関する調査レポート. <https://lab.testee.co/2019-fashion>

TOPLOG(2018).モードファッションってどんな服装？モードな装いが叶うブランドとは
<https://toplog.jp/225069>

Wikipedia(2019).ストリート系統

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3>

吉武久美子(1989).集団形成パターンと公的自己意識の高低が個人の判断に及ぼす影響.実験社会心理学研究,29(1),65-69.